

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 天王寺《てんのうじ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 念仏読経 | 四威儀《しいぎ》

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(例) [ # 地から1字上げ ] (大正五年十二月十三日)

-----  
天王寺《てんのうじ》の別当《べつとう》、道命阿闍梨《どうみょうあざり》は、ひとりそっと床をぬけ出すと、經机《きょうづくえ》の前へにじりよって、その上に乗っている法華經《ほけきょう》八の巻《まき》を灯《あかり》の下に繰りひろげた。

切り燈台の火は、花のような丁字《ちょうじ》をむすびながら、明《あかる》く螺鈿《らでん》の經机を照らしている。耳にはいるのは几帳《きちょう》の向うに横になっている和泉式部《いずみしきぶ》の寢息であろう。春の夜の曹司《ぞうし》はただしんかんと更け渡って、そのほかには鼠《ねずみ》の啼く声さえも聞えない。

阿闍梨《あざり》は、白地の錦の縁《ふち》をとった円座《わらふだ》の上に座をしめながら、式部の眼のさめるのを憚《はばか》るように、中音《ちゅうおん》で静かに法華經を誦《ず》しはじめた。

これが、この男の日頃からの習慣である。身は、傳《ふ》の大納言《だいながん》藤原道綱《ふじわらみちつな》の子と生れて、天台座主慈恵《てんだいざすじえ》大僧正の弟子《でし》となったが、三業《さんごう》も修《しゅう》せず、五戒《ごかい》も持した事はない。いや寧《むし》ろ「天《あめ》が下《した》のいづこのみ」と云う、Dandy の階級に属するような、生活さえもつづけている。が、不思議にも、そう云う生活のあい間には、必ずひとり法華經を読誦《どくじゅ》する。しかも阿闍梨自身は、少しもそれを矛盾《むじゅん》だと思っていられない。

現に今日《きょう》、和泉式部を訪れたのも、駿者《げんざ》として来たのでは、勿論ない。ただこの好女《こうじょ》の数の多い情人の一人として春宵《しゅんしょう》のつれづれを慰めるために忍んで来た。それが、まだ一番鶏《いちばんどり》も鳴かないのに、こっそり床をぬけ出して、酒臭い唇《くちびる》に、一切衆生《いっさいしゅじょう》皆成仏道《かいじょうぶつどう》の妙經を読誦しようとするのである。……

阿闍梨は褌衫《へんさん》の襟を正して、専念に經を読んだ。

それが、どのくらいつづいたかわからない。が、暫くすると、切り燈台の火が、いつの間にか、少しずつ暗くなり出したのに気がついた。焰《ほのお》の先が青くなって、光がだんだん薄れて来る。と思うと、丁字《ちょうじ》のまわりが煤《すす》のたまったように黒み出して、追々に火の形が糸ほどに細ってしまう。阿闍梨は、気にして二三度燈心をかき立てた。けれども、暗くなる事は、依然として変りがない。

そればかりか、ふと気がつくと、灯《あかり》の暗くなるのに従って、切り燈台の向うの空気が一所《ひとところ》だけ濃くなって、それが次第に、影のような人の形になって来る。阿闍梨は、思わず読經《どきょう》の声を断った。

「誰じゃ。」

すると、声に応じて、その影からぼやけた返事が伝って来た。

「おゆるされ。これは、五条西の洞院《とういん》のほとりに住む翁《おきな》でござる。」

阿闍梨《あざり》は、身を稍後《ややあと》へすべらせながら眸《ひとみ》を凝《こ》らして、じっとその翁を見た。翁は經机《きょうづくえ》の向うに白の水干《すいかん》の袖を搔き合せて、仔細《しさい》らしく坐っている。朦朧《もうろう》とはしながらも、烏帽子《えぼし》の紐を長くむすび下げた物ごしは満更《まんざら》狐狸《こり》の変化《へんげ》とも思われない。殊に黄色い紙を張った扇を持っているのが、灯《あかり》の暗いにも関らず気高《けだか》くはっきりと眺められた。

「翁《おきな》とは何の翁じゃ。」

「おう、翁とばかりでは御合点《ごがてん》まいるまい。ありようは、五条の道祖神《さえのかみ》でござる。」

「その道祖神が、何としてこれへ見えた。」

「御經を承《うけたま》わり申した嬉しさに、せめて一語《ひとこと》なりとも御礼申そうとて、罷《まか》り

出《いで》たのでござる。」

阿闍梨は不審らしく眉をよせた。

「道命《どうみょう》が法華經を読み奉るのは、常の事じゃ。今宵に限った事ではない。」

「されば。」

道祖神《さえのかみ》は、ちょいと語を切って、種々《しょうしょう》たる黄髪《こうはつ》の頭を、懶《ものう》げに傾けながら不相変《あいかわらず》呟くような、かすかな声で、

「清くて読み奉らるる時には、上《かみ》は梵天帝釈《ぼんてんたいしゃく》より下《しも》は恒河沙《こうがしゃ》の諸仏菩薩まで、悉《ことごと》く聴聞《ちょうもん》せらるるものでござる。よって翁は下賤《げせん》の悲しさに、御身《おんみ》近うまいる事もかない申さぬ。今宵は」と云いかけながら、急に皮肉な調子になって、「今宵は、御行水《ごぎょうずい》も遊ばされず、且つ女人《によにん》の肌に触れられての御誦經《ごずきょう》でござれば、諸々《もろもろ》の仏神も不浄を忌《い》んで、このあたりへは現《げん》ぜられぬげに見え申した。されば、翁も心安う見参《げんざん》に入り、聴聞の御礼申そう便宜を、得たのでござる。」

「

「何とな。」

道命阿闍梨《どうみょうあざり》は、不機嫌らしく声をとがらせた。道祖神《さえのかみ》は、それにも気のつかない容子《ようす》で、

「されば、恵心《えしん》の御房《ごぼう》も、念仏読經 | 四威儀《しいぎ》を破る事なかれと仰せられた。翁の果報《かほう》は、やがて御房の墮獄《だごく》の悪趣と思召され、向後《こうご》は……」

「黙れ。」

阿闍梨は、手頸《てくび》にかけた水晶の念珠をまさぐりながら、鋭く翁の顔を一睨《いちべん》した。

「不肖ながら道命は、あらゆる經文論釈に眼《まなこ》を曝した。凡百《ぼんびやく》の戒行徳目《かいぎょうとくもく》も修せなんだものはない。その方《ほう》づれの申す事に気がつかぬうつけと思うか。」が、道祖神《さえのかみ》は答えない。切り燈台のかげに蹲《うずくま》ったまま、じっと頭を垂れて、阿闍梨の語《ことば》を、聞きすましているようである。

「よう聞けよ。生死即涅槃《しょうじそくねはん》と云い、煩惱即菩提《ぼんのうそくぼだい》と云うは、悉く己《おの》が身の仏性《ぶつしょう》を觀ずると云う意《こころ》じゃ。己が肉身は、三身即一の本覺如来《ほんがくにょらい》、煩惱 | 業苦《ごうく》の三道は、法身般若外脱《ほっしんはんによげだつ》の三徳、娑婆《しゃば》世界は常寂光土《じょうじゃつこうど》にひとしい。道命は無戒の比丘《びく》じゃが、既に三觀三諦即一心《さんかんさんたいそくいっしん》の醍醐味《だいごみ》を味得《みとく》した。よって、和泉式部《いずみしきぶ》も、道命が眼《まなこ》には麻耶夫人《まやふじん》じゃ。男女《なんによ》の交会も万善《ばんぜん》の功德《くどく》じゃ。われらが寢所には、久遠本地《くおんほんじ》の諸法、無作法身《むさほっしん》の諸仏等、悉く影顯《えいげん》し給うぞよ。されば、道命が住所は靈鷲宝土《りょうじゅほうど》じゃ。その方づれ如き、小乗臭糞《しょうじょうしゅうふん》の持戒者が、妄《みだり》に足を容《い》るべきの仏国でない。」

こう云って阿闍梨は容《かたち》をあらためると、水晶の念珠を振って、苦々《にがにが》しげに叱りつけた。

。

「業畜《ごうちく》、急々に退《の》き居ろう。」

すると、翁《おきな》は、黄いろい紙の扇を開いて、顔をさしかくすように思われたが、見る見る、影が薄くなって、螢《ほたる》ほどになった切り燈台の火と共に、消えるともなく、ふっと消える」と、遠くでかすかながら、勇ましい一番鶏《いちばんどり》の声がした。

「春はあけぼの、ようよう白くなりゆく」時が来たのである。

[ # 地から1字上げ ] (大正五年十二月十三日)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986 (昭和61) 年9月24日第1刷発行

1995 (平成7) 年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。